

「大戦秘史リーツェンの桜」 館澤貢次著 海をわたった日本人・肥沼信次



肥沼信次

ドイツの教科書に載っている人物に肥沼信次医博がいます。終戦時に発疹チフスが蔓延したドイツの医療センターで唯一人医師として従事し、多数の患者を助け、励まし続けました。この功績を称え少年少女の柔道大会「肥沼杯」が毎年開催され、また「肥沼通り」と名付けられる桜並木があり、さらに名誉市民として彼の墓は今も守られています。

数学の鬼となる

医師肥沼信次は、1908(M41)生まれ、父梅三郎は八王子に「肥沼外科医院」を開業。信次には、2歳上の長男がいたが夭折したので、医業を継ぐ者として厳しく育てられた。信次の末弟も外科医でしたが結核で亡くなっています。

小学生の頃、数学がわからず家庭教師を付けられて徹底的に教え込まれました。ところが中学に入ってからには俄然、数学が面白くなり、大学では独語で数学の原書を読んでいます。友達から「難しい本をよんでいるんだね」と声をかけられると「うん」と云って気軽に返事をする大変おとなしい人でした。

大学の卒業アルバムの趣味欄に「数学」と記載しています。すでに「数学の鬼」の片鱗をみせつけていました。

信次は余りに数学に偏り過ぎた為か、1年後に日本医科大学に入学します。その後、34年東京帝大の放射線科に入局しています。

当時、盧溝橋事件から、日中戦争がはじまり、5・15事

件(犬養総理殺害)が起り、ドイツでは世界制覇を目論むヒットラーが総統になり不穏な時世でした。

しかし、憧れのアインシュタインやキュリー夫人が居たドイツに留学することを決意するので。特にアインシュタインの「誰かの為に生きてこそ人生には価値がある」という言葉が、その後の肥沼の人生を大きく左右する事になります。

憧れのドイツに

37年(S12)横浜港を発ちます。信次29歳。見送りには放射線教室の仲間と母ハツ(51)、弟栄治(26)でした。しかし、これが最後の別れとなるのでした。航海の途中、別府に転地療養している同級生の野口氏を見舞い、そこで母の作った着物をカバンから取り出して嬉しそうにしていたと後に野口夫人は話します。

約40日を掛けてスエズ運河を経由して5月末に仏のマルセイユで下船し、汽車でベルリンに到着。母宛てには多数の絵葉書や手紙、写真を送っています。45年の八王子

大空襲ですべてを焼失してしまいました。

信次は、交換留学生として第一歩を歩み、2年後には財団の奨学生に選ばれます。ベルリン大学の放射線研究所では、発がん物質に関する論文において、原子力に基づいた数学的方法を導入しています。



放射線医師として

はベルリン大学教授・資格取得に正教授として何のためらいもなく授得させます。戦前、東洋人では肥沼一人だけでした。

日本人の中の日本人

留学7年目の、44年8月、肥沼信次氏は『日本における自然科学―欧州の影響と独自の研究』という重要な講演を行っています。

日本民族の優秀性として、ライプニッツやニュートンと同じ時期に日本人の「関孝和」は書式こそ違いますが高等な微分学と同一の計算式を考案していること。さらに、人工的に癌を発生させた「山極」や「市川」、そして「吉田富三」の移植による吉田肉腫の発見。さらに、「湯川」がノーベル賞を受ける5年前に肥沼は中間子論を最大限に評価しています。また、雪氷物理学者の「中谷宇吉郎」などを挙げ、もはや日本の自然科学は欧州の弟子ではなく同等の研究者として活躍できることを、誇りに思っています。のであると発言しています。

